

建学の精神・校訓「眞實心」について

一 郷 正 道

はじめに

それではしばらくお話させて頂きます。初めてのことでみなさまにご理解していただけるお話ができるかどうか自信がありませんが、しばらく静かに聞き下さい。

まず最初に「学則」を挙げておきましたから、それをちよつとご覧下さい。

本学は教育基本法に基づき、学校教育法に定める大学として学術を研究教授し、広く文化の進展に寄与するとともに、仏教精神により円満なる人格を涵養し、も

つて有為なる女性を育成することを目的とする。

これが大学の学則の第一条です。その下は短期大学の学則の第一条です。

仏教の精神によって人格を陶冶し、もって広く文化に貢献する有為なる女性を育成することを目的とする。

こういうふうに学則では定めております。従いまして、本学は仏教の精神によって有為なる、何か立派な仕事を行うという女性を育成することを目的とした大学であるというふうに、まず学則で謳うわけです。そうしますと、その仏教精神とは何かと言えば、それが校訓の「真実心」ということになるわけです。校訓は学校が教え導くものという意味ですから、この本学は、「真実心」を持って教え導く大学ということになります。ところがこの「真実心」という言葉、校訓は非常に抽象的ですよね。なかなかわかりにくい。ですから今日は、「真実心」とはなんぞや、ということをしばらくお話させて頂こうと思っています。

建学の精神・校訓「真実心」について

真 実 心

その前に、この校訓を「真実心」にしようとお決めになったのは誰であるか、みなさんご存じですか。それはですね、この大学を創設なさった故大谷智子様という方です。この、大谷智子様は、東本願寺のお裏方、前の御門首の奥様で、前の皇后陛下のお妹様。この方が大谷智子様です。それでは、大谷智子様は、どこからこの「真実心」という言葉を採用されたのかと言いますと、私、察しますに、親鸞聖人の主著である『教行信証』または、『浄土文類聚鈔』という書物からお取りになったと思うんです。皆さん方はどうでしょう、親鸞聖人がどんな方か覚えていらっしゃいますか。鎌倉時代の新仏教を代表する革新的なお坊さんだったですよ。本願寺を始められた方で、実は今から四年後の二〇一一年には、この親鸞聖人の七五〇回忌という大法要がとまるわけです。その親鸞聖人の一番大事な著書が『教行信証』と言うんです、その『教行信証』の「信」の巻に『涅槃経』というお経からの引用として、「真

実というはすなわち如来(仏)なり。如来(仏)はすなわちこれ眞実なり。」という言葉が見られるんです。言い換えますと、眞実というのは如来〓仏さんのことだというわけです。仏さんと言いましても〓如来〓という言葉が使われました時には、原語は「Tathagata」という言葉なんです。これは梵語、サンスクリットですが、漢訳しますと〓如来〓とも訳すし、〓如去〓とも訳すわけです。〓真如(Tathata)〓から来生した仏さんという意味で使われています。ですから、真如のままやって来られた、あるいは去った。つまり、眞理に従い眞理のままに動くというふうに理解して頂いていかもしれませんね。従って〓眞実〓というのは〓如来〓ですと。そうしますと、それに〓心〓を足す「眞実心」というのは、イコール如来心、仏心である、とそういうことになります。「眞実心」というのは、如来(仏)の心であるということになります。

それでは如来の心、仏の心とは一体どういう心でしょうか。それは『仏説観無量寿経』というお経を見ますと、こういう文言が出てくるんです。今、『仏説観無量寿経』を唐突に出しましたが、このお経がいつどこで作られたかということは学界で大きな

建学の精神・校訓「眞實心」について

問題なんです。一応ここでは中央アジアで作られて五世紀頃中国に伝わって訳されたお経だという見解に従っておきます。その仏心、如来の心とは何かと言いますと、「仏心というは大慈悲なり。無縁の慈悲をもつてもろもろの衆生を摂す。」という言葉が出ています。ですから、仏心、如来心というのはイコール慈悲の心だということになります。そうしますと、この公式でもって仏心というのはイコール慈悲心ということになります。だからこの本学の掲げる校訓の「眞實心」というのは、言葉を換えて言うなら、慈悲の心ということなんでしょう。一つまず頭の中に入れておいて下さい。「眞實心」というだけではちょっとわかりにくいけれども、それが実は慈悲の心なんだということですね。「眞實心」とは慈悲の心。

今度は当然、慈悲の心とはどんな心なのかということが問題になりますね。それを今からお話していくわけですが、それをお話するためには少しお釈迦様のお話をしてみたいと思います。来月の八日に「花まつり」が大学で催されます。それはお釈迦様のご誕生を記念しての学園をあげての重要な行事なんです。何でお釈迦様のお生まれになった日をお祝いして、大学でそういう行事が行われるのかということなんで

す。一つは先程言いました「真実心」というのは、親鸞聖人のお言葉でしたが、それは『涅槃経』というお経に見られるお言葉ですよね。お経をお説きになったのはお釈迦様です。だからお釈迦様がこの世にご誕生されたのは非常に大事なことなんです。だから本学の建学の精神は、実はお釈迦様にまで行き着くというわけです。それが第一の理由。もう一つの理由は、お釈迦様のお説きになった仏教の教えが、今のこの世界中で非常に注目されているんです。何故かといいますと、この現代、私たちが生きているこの時代というのは、非常に困った時代、苦しみの時代ですよね。皆さん方、毎日毎日マスコミを通じていろんなことが入ってるでしょう。戦争や、テロや、残忍な殺人事件が毎日毎日起こっているでしょう。環境は汚れるし、自然は破壊されてますよね。地震などによる天災、あるいは多発する交通事故。それから、自分でなりたいたと思っているわけではないのに我々は病気になるし、若さはだんだん衰えていきます。僕の頭なんかもう真っ白になっちゃってますよね。あるいはまた、昨日まであんなに仲の良かった友達が、今日になったらガラッと変わってしまったって一体どうなっているのかと。つまり、友情というものに疑問を持ったりもしますよね。あるいはま

建学の精神・校訓「真実心」について

た、会いたくない人によったり電車だとか地下鉄で出会ってしまつて、何という言葉をかけて挨拶したらいいか困つてしまつ、といったことも我々は経験しますよね。家ではそれこそ、お母さんがおばあちゃんと毎日毎日角付き合わせて生活してゐるような所にいらつしやる方もいるかもしれませんね。あるいは皆さん方だったら、あれが欲しい、これが欲しいと思つても、ちつとも、なかなか手に入らないでしょう。これも全て苦しい悩みですよ。という具合に、毎日毎日そんなことを皆さん方も経験していらつしやると思うんです。私たちは苦しみの真つ只中に生きてゐるわけです。そういう苦しみから解放されるための教えをお説き下さつたのがお釈迦様だったんですね。ですから、私たちはお釈迦様に感謝して、そのご誕生をお祝いするわけです。それが「花まつり」の行事なんです。それが来月の八日には全学を挙げて行われますので、必ず参加して下さいね。

今、お釈迦様は苦しみから解放することを教えて下さつた人だということをお話しいたしました。それではその苦しみ、悩みの原因は何なのかということですが、皆さん、何が我々の苦しみ、悩みの原因だと思いますか？ お釈迦様がおっしゃるには、

煩惱と無知。これが我々の苦しみの原因だとおっしゃったんです。煩惱というのは具體的にはどういふことかと言うと、貪りの心、怒りの心、愚かさ、この三つ。これが煩惱というものの内容なんです。煩惱を除くことによって苦惱から解放されるということですよ。つまりお悟りに達するんだと言うんですが、それだけでは実は十分ではないですよ。そこに実はもう一つ透徹した叡知と言いますか、輝きと言いますか、最高の智慧ですね。智慧というものがなかったならば悟りとは言えないんですね。煩惱だけなら、身近に見ても、例えば、愛欲の煩惱なんて、普通の人間でも、だんだん年を取ってきますと衰えてきますよね。無欲恬淡むよくてんたんなお年寄りをよく見かけます。ところがそういうお年寄りには、ややもしますと智慧の方も衰えちゃうんです。それじゃ困るんです。愛欲の煩惱は衰えても智慧までも衰えてしまう。これじゃダメなんです。ですから、煩惱を除くということも大切ですが、更に智慧を得るということ、智慧の獲得というのが大事なんだということです。

建学の精神・校訓「眞實心」について

縁起

お釈迦様がどうやって智慧を獲得されたかということをお話します。それは、縁起ということにお気付きになって、いわゆる“悟り”を開かれたんです。お釈迦様の伝記を読みますと、お釈迦様は菩提樹の下で縁起という、その道理に目覚めて悟りを開かれたと書いてあるのですけれども、その縁起というのは何かという問題ですね。皆さん方、毎日毎日の生活の中で縁起という言葉を使うでしょう。その時、どんな意味で使いますか？縁起がいいとか悪いとか、ものの良し悪し、そういうところで縁起という言葉を使いますよね。その縁起という言葉の使い方は、本来の仏教の理論とは違うんです。あるいは、お寺の由来だとか成り立ちだとか、そういう意味を持って縁起という言葉が使われますよね。例えば美術の方では「華嚴縁起」「信貴山縁起」という言葉が日本史の教科書に出てきたでしょう。そのように使われます。これも今からお話しようと思っっている仏教の縁起という言葉の内容とは違うんです。そ

れでは縁起というのはどういう考え方なのかと言いますと、まずは言語的には「pratyā-samutpāda」というのが縁起という言葉の元の原語です。意味はまさに漢字で書く通りで、「縁りて起こる」というのが縁起というものの意味です。経典、お釈迦様がお説きになったお経にはどんな文章でもって縁起という言葉が出てるかと思ますと、

これあれば、かれあり。これが生ずることによって、かれが生ずる。

これがなければ、かれなし。これが滅することによって、かれが滅する。――

すなわち、無明を縁として行あり、行を縁として識あり、……生を縁として老・死があり、憂愁・苦悶が種々に生じる。

こういうお経の文句があるんです。これは長尾雅人先生の『仏教の源流』（二六二頁）という書物に出てくる文言なんです。この長尾先生というのは我々の大恩師なんです。日本の学士院会員にもなられた大変素晴らしい先生でした。その先生の訳を今お借りしているんです。

これが実は縁起の理論なんです。今日は前半の四句を縁起の原理を示すものと考え

建学の精神・校訓「眞實心」について

まして、もう少し縁起ということについてお話しようと思ふんです。「これあれば、かれあり」というのは、つまり、AによってBあり。この場合のAとBは、「かれ」とか「これ」という、代名詞に過ぎない。何か特定のものを指して、「これ」とか「かれ」とかいう言葉が使われているのではないです。不特定なもの、不確定な何ものかを表す「これ」とか「かれ」とか「縁」とあたるわけです。「〇〇あれば」これあれば、「〇〇あり」かれありという二つの関係、これが大事なことなんです。AによってBがある。AがなかったらBがないという関係。これが縁起の関係というんです。この縁起は二つのAとB、「これ」とか「かれ」という二つのものの間の条件、あるいは根拠を示している言葉だと言えます。つまり二つのものが、相互に条件、あるいは根拠となること、相対的であることを示しています。AというものとBは相対の関係によって存在しているんだと。何かがあるという時に、AがBと関係なく、独立してAがあるというんじゃないくて、他のもの、Bに寄りかかることで初めてAというものが存在する、成り立つんだという考え方です。必ず他の何かに対してあるのであって、あらゆるものは、相互に、相対的な関係の中にのみ成り

立っているんだというわけです。結論としては、縁起という考え方は、「縁りて起る」ということなんです。何もものかによって、つまり、何もものを縁として、何もものが起こることですから、「これがあるによって、かれあり」という条件付けの関係、それが縁起というものの考え方だというんです。別の言葉で言いますと、縁起という考え方は相対性の理論なんだというふうに言うことができます。例を挙げて考えましょう。まず最初に出しておいたのですが、東と西。東と西という方角はどうですか、皆さん。東は東だけだったら東とは言えないでしょう。もしも東がなかったら西もない。西がなかったら東と言えないでしょう。だから西に縁つて東はあるし、東に縁つて西があるという関係でもって、東とか西という方角の言葉が成り立っているわけです。これが縁起の関係なんです。あるいは短と長。短いと長いという考え方。この白墨に短いのと長いのがあるとします。これが短、こつちを長。この長は、短ということがなければですね。短も、長というものがなかったならば短は成り立たないでしょう。長短というのは相対立するものなだけけれども、他のものに寄りかからんことには、長は短に寄りかかって、短は長に寄りかかって初めて短とか

建学の精神・校訓「真実心」について

長というものが成り立つ。これを縁起と考えます。これは何にでも当てはまります。次は親子の関係。子どもが親から生まれて来る。これは誰もが認めますよね。常識ですよね。だけでも、親というものはどうして誕生するかという、一介の男性が「お父さん」と呼んでもらえるのは、赤ちゃんが誕生して初めて「お父さん」にしてもらう。一介の女性が「お母さん」と呼んでもらえるのは、赤ちゃんが誕生して初めて「お母さん」と呼んでもらえるんでしょう。だから、子どもは親がなければ生まれてこないけれども、親というものも、子どもが誕生して初めて親が誕生する。そういう関係。子どもは親によって生まれるし、親もまた子供によりかかって初めて親になる、その親子の関係。これも縁起です。もう一つ、机。この机というのは何からできてる？ 木からできてます。その下を見ると鉄の芯棒が入ってます。あるいは塗料でコーティングしてある。こういうものを作るためには家具屋さん、それを作る技術を持った人が努力して、こういう机はできるでしょう。机というものはこういう木だとか鉄だとか塗料だとか作った人の努力とか、そういうものがより集まって、総合してはじめてこういうものができ上がってきて、それをたまたま私たちは「机」という名

前を付けているにすぎない。何故かという、机というのは古くなってだいぶ傷がついてくる。これを火にくべたらどうなる？ 机じゃなくて灰になっちゃうでしょう。あるいはまたね、猫がピョンと乗ってきて、ここで猫が居眠りを始めるとしますね。そうするとこれは机じゃなくて、ベッドでしょう。もしも僕がここでお尻を乗せたら机じゃなくて椅子に変わっちゃうよね。それが机というものの姿なんです。それが縁起の関係というものの内容なんです。机なら机という絶対的な存在は一つもないということの教え。つまり、相対的にしかモノは存在しないんだということを教えるもの。これが仏教の縁起という考え方なんです。これが仏教では一番大事な教えなんです。よく皆さん方は、仏教と言えば「無常」とか「無我」ということを教えるものだというふうに聞いているでしょう。何故、無我なのか。何故、無常なのかというと、その根底にあるものは、今お話している縁起というものの考え方によって初めて、無我でもあるし無常でもあると言えらるわけね。仏教の一番大事な教えは何かと言うと、縁起という考え方なんだということ、この際一つ覚えておいて下さい。

縁起というものに対してもう一つお話をします。入学式の時にもちよつと触れたん

建学の精神・校訓「眞實心」について

ですけれども、「私の命」というふうに私たちは表現するでしょう。皆さん方の命は本当に自分ものというふうに思ってますか？ 本当に私の命は私のものと言えますか？ それをちよつと考えてみよう。まず、縦と横の軸という観点から「私の命」を分析するとどうなるかという問題です。最初は縦の軸で考えてみよう。そうしますと、ここに、私がありますよね。私はお父さんお母さんが居ったからこそ賜った命だね。もしおじいちゃんおばあちゃん居られなかったなら、この私はないよね。私は見たことも口を聞いたこともないけども、ひいおじいさん、ひいおばあさんがおられなかったならば、やはり私というのはあり得ない。そうすると、「私」というけども、その私のルーツを辿っていくと、その先は無限の過去に遡っていく。それくらい深い長い歴史があつて初めて今の私の命があるわけ。だから今の私の命の中にはそういう意味では、無限の過去に遡っていく、そういう命の流れがあつて初めて今の私の命があるんだと。私の命といつても、今の私たちお互いの命の中には無限の過去に遡っていく、そういう深い長い歴史が続いてきた。その命が集約された形で今の私たちの命があるんだということを認めざるを得ない。今度は逆に未来のことを考えたらど

うだろう。私には子どもがいるよね。ここにまた孫が生まれる。やっぱりこれも無限大になっていく。そうすると私の命と言うけれど、今の私たちの命の中には無限の過去に遡っていく命もあるし、あるいはまた無限の未来に展開していく、そういう命すらも現在の私の命の中にあるんだということを認めざるを得ないでしょう。ところが、我々は命というのは、この世に生まれて存在した時間だけ、五十年であったり八十年であったり、それだけが我々の命と考えてしまいがちですよ。それはやっぱり正しい理解とは言えない。不十分な考え方だね。過去・現在・未来という時間の流れ。これは不連続の連続ということ。いつも生まれては死に、死んでは生まれという、その繰り返しによって私たちの命というものはこの世に今あるんだな、ということとがまず一つ。そういうふうな流れの中において今の私の命があるわけだから、そういう命を「私のもの」という所有格で呼んでいいのかな。呼べないんじゃないかなと思うね。今、縦の軸で言いましたが、同じことを横の軸でも言えるんですよ。私には兄弟がいる。親類の方がいらつしやる。それから町内の人との付き合い、私は学生さんとの出会いがある、学生さんとの出会いがあるから私は先生と言われる。そういう

建学の精神・校訓「眞實心」について

ふうに横に繋がっていく繋がりも否定できないよね。横の繋がりは何も人間関係だけにとどまる必要はないわけ。家で飼ってるペットとの関わり、あるいはもう少し範囲を広げて自然環境との繋がり、これは他者、[〃]他[〃]なるものだよ。こういう[〃]他[〃]なるものとの繋がりを絶ってしまったら、やはり今の私は成り立たないでしょう。私の命と言うけれども、縦の軸、横の軸、分析していけばいくほど無限にその他のものとの繋がりによって、初めて今の私の命があらしめられているんだなあ、ということを確認ざるをえないですよ。これを「私のもの」と所有格では表現できなくなるんじゃないかと思うんです。私の命は、縦の軸は時間的、横の軸は空間的に、しかも目に見えないもののみならず、目に見えないものを含めての、ありとあらゆる原因、条件、仏教の言葉で「ご縁」と言うんだけれども、そういうものによってはじめてあらしめられているんだということ。こうして私という人間があらしめられているんだということ。という事です。

これは入学式の時にもお話ししましたけれども、今、私たちは「私の命」と言うでしょう。具体的には、何をもって皆さん方は「私の命」と思っている？ 何が

皆さん方の命の証ですか？ 僕はこの心臓の鼓動、脈搏、これが私の命の具体的な姿だと思っんです。そしたらそれは私の命でしょう。そうしたらこれは自分の心臓だから、自分の心臓を鼓動させようと思えば鼓動させることができるはずだね。皆さん方、私の命、自分の心臓の鼓動を鼓動させることはできないし、もう大分長いこと働いてくれたから少し休ませてやりたいと思っても休ませることはできない。全然自分、私の命令を全然聞かないじゃない。そんなものを「私のもの」なんて言えるのか。そんなふうに私は思わざるを得ないですね。それが縁起の関係によって、実は私の命は成り立っている、という事実です。

「生きている」↓「生かされている」

そんなふうに考えていきますと、普段我々は、今私がここに生きているのは自分の意思だとか、能力だとか、努力だとか、私が頑張っているから、だからこうして生きているんだとか言っているけれども、どうもそういう表現が当たらなくなってしまう

建学の精神・校訓「真実心」について

よね。それではどういうふう理解したらいいのか。「生きている」んじゃないかって「生かされている」という、そういう自分についての理解が正しい理解だと思うな。今までこんなこと気にもとめなかった、思いもよらなかったかもしれないけれども、一つ今日を限りに、私は生きているんじゃないかって、生かされている存在なんだという受け止め方を、しっかりと頭の中に入れておいて下さい。それをわかりやすく理解するために、相田みつをさんの詩を読んでみよう。

過去無量の

いのちのバトンを受けついで

いまここに

自分の番を生きている

それが

あなたのいのちです

それが

わたしのいのちです。

相田みつをさんの詩、どうですか。わかりますか。なるほどと認めざるを得ないでしょう。

そうになると、私の命とかあなたの命と、区別できないものになってしまいうわけね。もう一つの例は、桑田真澄という人の言葉。桑田真澄って誰か知ってる？ 巨人軍のピッチャーです、今アメリカに行って苦勞している、メジャーリーグに入るために頑張つて。彼がちょうど去年の今頃、二年半ぶりに勝利投手になった。その時の東京ドームでのお立ち台での彼の言葉なんです、新聞に載っていました。それを紹介します。

長かった。勝てなくなつて、今まで経験したことがないほど、みんなに励まされてきた。生きるというより、いかされてるんですよね。

と、彼はこうしゃべったんですよ。素晴らしいことだね。生きているというより「生かされているんですよね」と言った。彼が仏教徒だとは思わないけど、この言葉はまさに仏教の精神が身についたから出た言葉だと言つていいと思うな。彼はエースでしたから、一生懸命努力したんでしょう。でも、ちっとも勝てなかった。で、二年

建学の精神・校訓「眞實心」について

半ぶりに勝った。それを振り返って考えて、自分も努力はした。でも勝てなかった。今年半ぶりに勝ってみると、やはりこれは自分の力じゃなくて、みんなに助けられて励まされて勝ったんだという、感謝の気持ちがある。生きていこうというより生かされているんですよという考え方。これが大事だと思う。ですからもしも皆さん方、これまでこういう思いを持ったことがなかったらね、今日を限りには非ともこんな考え方を身につけて欲しいと思いますね。

悟り—説法躊躇—梵天勸請—初説法

今までお話してきましたように、私の命も、この机も、この世の中に存在するもの全て、縁起の関係において、初めて成り立っているんだということを教えて下さったのは、今から二五〇〇年前にお生まれになって活躍なさったお釈迦様という方なんです。縁起という考え方を初めてお説きになったのが、お釈迦様なんです。どうか、二五〇〇年前の考え方が今でも通じるでしょう。すごいと思わない？ 仏教の教

えはそういうものなんです。二五〇〇年前のお話なのよ。それが現代の私たちにそっくりそのまま当てはまるでしょう。通じるでしょう。お釈迦様は縁起の理論に気付いて悟りを開かれたんです。ですから、縁起の理論の発見が、智慧の獲得ということなんです。縁起の理論、この道理の発見、これが智慧の獲得。つまり、お悟りの内容です。お釈迦様はこの縁起の理論に目覚めて苦しみから解放されたわけです。ですからお釈迦様はこれによって、自分が悟りを開かれたわけですから、自分の目標は達成されたわけです。それではお釈迦様はその後どうされたのかというのが大事な問題なんです。周りを見てみると、自分と同じように苦しみに沈んでいる人がいっぱいいるわけです。そうであれば、お釈迦様ご自身が解放された、それは縁起の理論に目覚めて苦しみから解放されたんですから、周りにいる、苦しんで悩んでいる人たちに、同じようにこの縁起の理論を伝える、説法をする、そうすれば周りの人も、自分と同じように悟りに達するはずですよ。お釈迦様はそこで自分の悟った内容である縁起の理論を説法なさればよかったです。ところがお釈迦様はそれをなさろうとしなかったんです。そこに説法の否定とか説法の躊躇ということが起こったんです。文献にはど

建学の精神・校訓「真実心」について

う出ているかと言うと、

長い労苦の末、今や最高の真理を体得することができた。しかし、それを人々に語ることはやめよう。愛欲と憎悪とに悩まされている世間の人々が、この教えを理解することはなかなか容易ではない。この教えは微妙であり、常識に逆行するところがある。極めて深く微細で、見ることも容易ではない。愛欲に燃え、真つ暗な無知の闇に覆われている人々は、それを理解し得ないであろう。（前掲、長尾書 八〇頁）

そういうふうにお感じになって、自分の悟った内容をみんなに説明しようとなさらなかったんです。そうしましたら、そのことを知ったブラフマー神（梵天）という神様が、非常にびっくりしまして、急いで天から降りて来られたんです。そしてお釈迦様に次に示した文章のように申したんです。どうおっしゃったかと言うと、

せっかく悟りを開いて最高の仏陀となられた方が、悟られた法を人々に話さないで、そのまま涅槃にお入りになるということは、人々にとつてたいへん不幸なことです、どうかぜひとも説法をお始め下さい。それにこのマガダの国には、垢れ

た邪説がいろいろ行われております。六師外道の説などがそれです。それに対してもどうか、垢れなき正しい法をお説き下さい。きっとそれを理解しうる人間もいるはずです。（同長尾書 八〇頁）

そういうことを梵天という神様がお釈迦様におっしゃったんです。そこに難しい言葉が出ていますね。六師外道というのはどういう言葉かと言うと、「六師」ですから六人の先生という意味。「外道」というのはインドにある仏教以外の古いインドの思想、宗教、教え。これが外道。仏教以外の教え、哲学。それを外道という。六師外道というのは昔からの古い教えを持っている六人の先生。具体的には、唯物論とか、自然論とか、運命論とか、そういうものがこの六人の先生方の説なんですけれども、そういう六人の外道の説が非常に垢れていて邪説だと。「垢れなき正しい法」という言葉が出てきますけれども、「法」というのは、意味は教えなんです。正しい教え。そういうふうに理解します。そういうふうにブラフマー神が、再三、お釈迦様に説法を下さいと頼むんです。結局は、再三にわたって梵天から説法を頼まれたものですから、説法に踏み切るんですけれども、その時お釈迦様が考えられたのは、例えば、池

建学の精神・校訓「眞實心」について

がありますね。蓮の花が咲いています。ある蓮の花は水面から見えて咲き誇っている。池の中に沈んでちっとも花を咲かせようとしない蓮もある。大半のものは、水面すれすれに今生きていて、ちよつと栄養分をやれば花を咲かせるという蓮の花が大多数なんです。お釈迦様はそういう大多数の、もうちよつとでも養分を提供すれば花を咲かせるという、そういう人を目指して、主に対象にして、説法に踏み切っていったんです。だけど、皆さん、今私の話を聞いて「おかしい」と思ったでしょう。梵天なんていう神様がね、人間のお釈迦様に説法を頼むなんていうことは、実際あり得ないよね。神様が降りてきてお釈迦様に説法してくださいなんて。考えられないね。これは歴史的事実とは違う。だけど何故こういってお話がお釈迦様の伝記の中に含まれているかという、これは実はお釈迦様のその時の心理状態、心の内容をこういう形でもって表したということを理解できると思いますね。

梵天はこういうことも言います。「悟りという宝を得たんだから、どうかそれを人々に分かち与えて下さい」とか、あるいは「そもそもあなたは出家して、六年の苦行をしてきたのは、人々を救おうという誓いを立てたからではないんですか。今その

誓いに背いて説法をしぶるなんてどういうことですか」という批判めいたことを梵天は言うんです。それは実は、お釈迦様自身の心の内面の葛藤をそんな形で示しているんだというんです。お釈迦様の心の動きがそんなふうに表示されているんだと思うんです。

それでは、何故、お釈迦様は説法をされようとなさらなかったの？ 躊躇なさったの？ しぶったんですかね？ 何故だろうね。その一つは、縁起の理論、お釈迦様が悟られた悟りの内容、これが非常に難しいもの。教えそのものが程度が高い。一方では、聞く人がなかなか理解できない。理解する能力が足りないということがあったんです。

もう一つ大事なことは、言葉というものの限界をお釈迦様は考えておられたんだと思います。だから説法を躊躇なさった。それはどういうことかと言いますと、今僕が一生懸命しゃべってる。皆さん方はそれを一生懸命聞いて下さるから、理解したような顔をして聞いていらっしやる。でも本当に理解できているかどうかは試験をやるかわかるよね。理解したつもりでも答案を書いてもらうと、全然違ったことが書かれて

建学の精神・校訓「真実心」について

あつたりするよね。言葉と言うのは必ず全てを伝えることができるようなものかというところじゃないね。そういう大きな問題があるんです。

それで昔から悟りの内容というのは、不可説、不可思議、そんな言葉で表現されるわけ。悟りの内容が不可説ということは、不可説は説くことができないうことでしょう。それは言葉でも語るができないし、文字で表わすこともできない。つまり、言葉を超越している、言葉から離れているもの、それが悟りというものの内容なんです。あるいはまた不可思議という言葉も使われる。悟りの内容は不可思議なものだという。皆さん方が不可思議という言葉を使う時は、単に不思議なものだとか、けったいなものだとか、そんな意味合いで不可思議という言葉を使うけど、そういう意味じゃなくて、思惟、考えること、つまり思惟することもできない。あるいは思惟してはいけない。それが悟りの内容だと。だから不可思議というふうに言うんです。悟りの内容というのは「冷暖自知」という言葉が示すようなものだと言うんです。つまり、「南極大陸は寒いよ」「赤道直下は暑いよ」といろんな人から聞くわけ。でもそんなこといくら聞いても、僕ら自身はあんまり実感しない。本当に南極が寒くて、赤道

直下が暑いかがどうしてわかるかといえは、私自身が赤道直下に行ってみる、あるいは南極に行ってみる。そうすることによって初めてその暑さ寒さがわかる。それと同じように、仏教のお悟りの内容というものは言葉でもっていくら教えられても理解できない。自分の身体で理解するもんなんだという、それが「冷暖自知」ということの内容なんです。ですからそういうことを、禪宗のお坊さんたちが、「不立文字、以心伝心」というそういう言葉で表す。不立文字というのは、文字を立てない。つまり文字を使わない。言葉でもって説明しようとしない。むしろ言葉でもって説明するんじゃない。以心伝心だから、一対一で会って、自然と、身体でもって伝わるもの、心と心で分かち合うようなもの、それが悟りの内容だというのが、不立文字、以心伝心ということの内容です。お釈迦様のお悟りになった内容はそういうものだと言われています。だから言葉では十分説明しきれない。だいたい悟りの内容、真理というものは言葉で表現できないでしょう。それなのに、それを言葉で表現しようとすること自体、考えてみれば無茶な話ですよ。だからお釈迦様が説法をするのを躊躇されたというんです。というふうにお釈迦様は考えられたんです、しばらくは。だけど最終

建学の精神・校訓「眞實心」について

的には説法をなさった。これはどういうことかと言いますと、お釈迦様が周りにいる人々に対する思いやりから、初めは説法を躊躇されたんだけど、今度は同じ思いやりからその説法を始められたわけです。ですから、三十五才で悟りを開かれて、あと四十五年間、八十才で亡くなるまで、お釈迦様は説法を続けられたわけです。ですから、この梵天が再三再四にわたって説法をして下さいと頼んだ。それによってとうとう説法に踏み切られたという、そのお心、そのお釈迦様のお心は、実は慈悲の心というものなんです。いいですか。慈悲の心とはそういう心なんです。今日初めにこの本学の校訓は「眞實心」であると、その眞實心とは慈悲の心のことでであると今説明したんですけれども、仏教の歴史において慈悲という考え方が初めて生まれたのは、このお釈迦様の全ての人を苦しみから解放してあげたいという、思いやりの心、それが慈悲の心。慈悲の心というのは、全ての人を苦しみから解放してあげたいという思いやりの心。それが慈悲の心と言われるものなんです。ですからお釈迦様が梵天に再三再四に頼まれて、そして説法に踏み切られたという事実が、実は慈悲の心の現れだというふうに我々は理解できると思いますね。

この慈悲の心、別の言葉で申しますと、「利他の心」とも言われる。お釈迦様は自分一人で悟りを開かれて、一応、ご自分は苦しみから解放されたわけです。だからご自分は目的を達成されたから、自分一人で悟りを楽しみ、味わってみようと思えばそうできたわけです。それでもよかったです。それも可能だったんです。ところがお釈迦様は、無限の他人に対する思いやりの心から、慈悲の心から、一切の生きとし生けるものの悩みを解決してあげたいと、苦しみから解放してあげたいという思いやりの心から、説法をなさった。つまり説法をなさったということは、つまり「利他の行」というもの。自分の利益だけ、自分のためだけに終わらないんです。他人のために説法をなさった。それが利他行ということの大事な内容なんです。

ところで皆さんは「菩薩」という言葉を聞いたことがありますか。文殊菩薩とかあるいは観音菩薩とか、あるいは勢至菩薩とか普賢菩薩とか、お地藏さん、地藏菩薩という言葉、耳にしたことあるでしょう。あの菩薩というのはどういう人ですかね。菩薩さんというのは自分のことを空しくして、己のことを空しくして、ひたすら他人のためになりたい、あるいは他人のために役に立ちたい、とそう思っって一生懸命努力す

建学の精神・校訓「眞實心」について

る人。そういう人を菩薩さんと言うんです。ですから、お話した言葉で言うと、利他行、利他ということに専念する、自分の利益より他人のためということを重ねて、利他の行を徹底すること、これが実は菩薩の精神になるわけです。菩薩の精神は、別の言葉で言えば、徹底した奉仕の精神です。他人に奉仕をする。これは利他の精神の現れなんです。今ずつとお話してきましたお釈迦様という方も菩薩です。ジャータカという書物があるんですが、これは「前生物語」と訳されるんです。お釈迦様の前世、前世のことを書いた物語なんですが、その物語を読んでいますと、お釈迦様は過去においては、うさぎであったり、鹿であったり、あるいは王様であったと言われる。そのお釈迦様が悟りを開いて仏陀、仏になることができたのは、それこそ、いく百年も、いく千年も前に、その前世において鹿とかうさぎとか王様として生まれ変わるたびに、決定的に献身的な「行」をなされた。つまり利他行をなされた。菩薩行をなされた。だから、お釈迦様がこの世において仏となられたんだと、ジャータカには出てくるんです。お釈迦様という方は利他行を徹底してなされた。それで仏様になられたというわけです。お釈迦様のことを仏陀と言いますね。仏陀というのは元々、サ

ンスクリットの横文字を発音だけ写した漢字です。意味は「目覚める」。仏陀、仏様というのは基本的には目覚めた人という意味なんです。その場合、自分が目覚めただけで終わってしまうんじゃないかと、他人をも目覚めさせようとして努力なさった。そういう意味で菩薩である。菩薩の姿がまた先程の如来という言葉になるんです。それでこの菩薩は、必ず「誓い」とか「願」を立てるんです。じゃ、何をお釈迦様は誓われたのかと言うと、生きとし生けるもの全てを救ってやりたいという、それがお釈迦様の願い、誓いだったんです。そういう願いがあって説法を始められた。その場合に大事なことは、生きとし生けるものが救われなければ、自分も実は仏になれないんだというんです。あなたが救われて初めて私も救われるんですよ、そういう誓い、願いをお持ちになって、それで一生懸命修行をなさった方、それがお釈迦様という方だったんです。あなたと一緒に自分も救われていきたいというんです。そういう意味で、菩薩さんの慈悲、利他の精神の塊だと言っていいでしょうね。

建学の精神・校訓「真実心」について

ま
と
め

そろそろお話をまとめることにしましょう。今、簡単ですが、お釈迦様のご一生の大事な部分をお話してきました。とくに悟りを開かれて初めて説法をなさった、そのプロセスをお話してきましたんですが、そこに実は、この大学の校訓である「真実心」すなわち「慈悲の心」というものを我々は見ることが出来る。お悟りを開いて、説法を躊躇なさって、梵天が何回も何回も説法をして下さいと頼む。その結果、ようやく説法をなさったというプロセスです。時間的には二週間です。わずか二週間の間。それがどういうことを意味するかと言うと、無から有への展開であると言えます。お釈迦様が悟ってしゃべらない、それは沈黙の世界でしょ。沈黙の世界は無の世界。それが沈黙を破って説法をなさった。それが有だというんです。だからそれは無から有への展開。

あるいはまた、個人的なものから全人的なものになったということ。お釈迦様お一

人が悟りを開かれたというのはお釈迦様個人の問題ですね。でも梵天の勧めによって説法なさったのは、自分一人の悟りで終わるんじゃないくて、全ての人に自分と同じような境地になって欲しいという、そういう願いがあった。だから説法なさったことによって、このお釈迦様が悟られた内容、縁起の理論は全人のものになりましたね。個人から全人への展開ということです。

それから仏教の専門用語を使って言えば、智慧から慈悲への展開だと言えるでしょう。仏教というのは悟っただけではダメなんです。悟った上で説法をなさる慈悲の心が生まれて、初めて仏教の教えになるわけです。逆に慈悲だけでもダメ。智慧がなきゃダメ。智慧から慈悲へと展開する。これで仏教は成り立つわけです。

それを別の言葉で言うと、自覚教から救済教への展開だとも理解できますね。お釈迦様がご自身が目覚めたのは自分で自覚なさったから。縁起の理論を自覚された、自分で目覚めた。それは自分が目覚めた教だから自覚教です。それが説法をなさったことよって今度は他人を救済しようという、そういうお心持ち、慈悲の心から説法なさったから、自覚教から救済教への展開が見られます。自利から利他への展開とい

建学の精神・校訓「眞實心」について

うことをそこに見ることが出来ます。ですから、私たちの校訓の「眞實心」は慈悲の心であったわけですが、その慈悲の心の発生の由来を今日はお話をしたわけです。

結論といたしまして、この「眞實心」、慈悲の心を英語で表わすと、COMPASSIONという英語が当てはまるんです。このCOMPASSIONという英語は、他人の苦しみを共有するという意味。つまり他人の苦しみを分かち合う。他人の苦しみを我がものとするという意味。それがCOMPASSION。更に苦しみだけじゃなくて、他人が喜んでいればそれも自分のものとして一緒に喜ぶという精神。これも慈悲なんです。あの人が喜んでいる、その喜びを自分のものとして分かち合っている。これも慈悲という考え方です。我々はなかなかできないですね。他人が喜んでいるのを自分も喜ぶなんてなかなかできないでしょう。仏教では他人の喜びをも自分の喜びとして受け止めて生きる。それが大事。

そういう慈悲の心が身について来ますと、誰をも差別なく受け入れることができ、そういう広い心というのが生まれてくるわけです。人の言うことをしっかりと聞いてあげられる人になれますね。ですから、慈悲の心が身についてくると、そこに本

当の友情が湧いてくると思うな。他人に対して本当に優しい人。これは慈悲の心を持った人ですよ。他人に対しての本当の優しさ、暖かさというのが出てくるんじゃないかと思うんです。そういう慈悲の心を具体的に分かりやすく示すお経の言葉がありませんから、それを紹介しておきましょう。『維摩経』というお経の中に出てくる言葉。

衆生病むが故に菩薩も病み

衆生癒ゆるをもつて菩薩も癒ゆ

衆生というのは生きとし生けるもの。全てのもの、人間だけじゃなくて動物も植物も含めて言うんですけれども、あの人が病んでいると菩薩も病気になると言っています。あの人の病気が治ることによって、菩薩も病気が治るんです。ちょうど皆さん方のお母さんを思い出したらいんじゃない？ 皆さん方が赤ちゃんの時、何か病気にかかるとのよ。風邪なら風邪にかかる。そうすると皆さんのお母さん方どうだ？ 自分のことのように心配して下さったでしょう。一生懸命看病して下さったよね。だから皆さん方が病気にかかると、お母さんも苦悩するわけだ。もしも君たちの風邪が治るとね、お母さんはホツとするだろう。君たちが病気から治ると、お母さんも病気から、

建学の精神・校訓「眞實心」について

苦しみから治る、解放されるんです。これが慈悲という心の内容です。この言葉を是非皆さん覚えておいても損じゃないと思うな。そんな具合にですね、この学校は校訓として「眞實心」を掲げているわけですから、これは皆さん方に慈悲の心を持つた、思いやりのある人になって欲しいという、大きな願いを持っている大学なんだというのを、最後に皆さん方、しつかり心に刻んで頂きたいと思います。

以上をもちまして、今日のお話を終わらせて頂きたいと思います。

〔参考書〕

長尾雅人「仏教の源流―インド」中公文庫

山口 益「般若思想史」法蔵館

——二〇〇七年四月二七日——